アロ

# アロ

今代魔王の名前。

高位裁判官によって，悪印象を植え付けられている：人間を憎んでいて兵力を増強している，人間をさらって奴隷にしている，ついでにもろもろの自然災害もアロが起こしている，など。

心優しく，戦いを好まない。けどかなり強い。なお話し合いも得意じゃない。

先代魔王の姿にあこがれて奮闘中。周りも温かく見守る。

古龍ベイリンを助けた時に，致死量の瘴気を取り込む。常に強力な解毒魔法で抑えているため，自分に30分以上寝られない呪いをかけている。健康上の問題はない。

「大輪の鱗月」を魔族全員に与えている。

# プレイヤー

勇者。

高位裁判官の要請で，アロを殺す旅に出る。

仲間はミグル，ヨルの2人。

# ミグル

後方支援職。

気楽な性格，口癖は「オーマイゴッド」。

のちにアロに一目ぼれする。

なぜか料理ができない。うどんを作るときに麺が全部燃えた経験あり。

# ヨル

弓が得意な戦闘キャラということに「なっている」。

アロの幼馴染だと偽り旅に同行。

魔法にたけて，常に幻覚魔法を用いて自身の素性を隠蔽。

その正体はアロ。ダンジョンの魔物などに指示を送り配置につかせたりする。旅を通してだんだんと勇者一行と仲良くなる。

うわさに聞いていた勇者と仲良くなれないかなと思い，少し前からヨルになっている。高位裁判官の件について知らないため，本気で人間に嫌われていると思い込んで結構落ち込む。自分が死ななければ，自分の加護「大輪の鱗月」により，魔族は毎月満月が昇るたびに復活するので，もともとは逃亡生活を始めるつもりだった。居心地のいいパーティーで過ごすうちに，自分がわざと倒されたら，人間と魔族の争いはなくなるのでは？と考え始めるようになる。

# ダンジョン

ダンジョンの中で命が失われることはない。

実は宝物の配置はアロが全て管理している。本人も楽しんでいるようだ。

# 高位裁判官

要塞都市「レメデ」の統治集団。世襲制であり，一人の子供までしか持つことを許されていない。

初代魔王に「原初の恥ずべき」借りがあることを代々屈辱に思っており，そのことを歴史から抹消するためにアロを殺そうとしている。しかしその事実は歴史上に存在しない。その考えが，かつて古龍ベイリンの体を蝕んだ瘴気によるものであることに気づいていないようだ。瘴気の影響でみんな小柄。

# 古龍ベイリン

マホリが瘴気になる反応の副産物が凝集して生まれた生命体。本人もそのことを知らず，「なんか長生きしてんなー」などとぬかしている。

世界の底にたまった瘴気を掃除しようとしたが，運悪く地震が起こった事で大量の瘴気が地上に漏れ出した。

自らの鱗と爪を引きはがして穴を修復したが，そこで体力を使いすぎたため，気を失いそのまま行方不明になっていた。周囲は濃度の高い瘴気により一寸先も見えない暗闇になる。

アロはベイリンを発見，彼を瘴気の束縛から引き出すために，ベイリンの体までの直線上にある瘴気を全て取り込んだ。アロの体内で非常にゆっくりと浄化している。この一件を通して，アロはベイリンとの交友を深めることになった。

# 瘴気

世界の老廃物。自然と世界の底にたまり，堆積する。

生物が取り込むと浄化するのにはかなり時間がかかる。生物の体を侵食するため，取り込んでいる間だんだんと生物の体は小さくなっていく。

裁判邸は瘴気が世界の底に沈む中間点になっており，高位裁判官は慢性的な中毒症状に陥っている。

# 世界

水泡のように透明で，非常に固い構造を持つ。

世界の外，「黒の海」に充満している「マホリ」というエネルギーでその存在を維持，瘴気を老廃物として底にためる。

魔法は世界に属さない致忌の知恵であり，マホリをエネルギーとして発動する。そのため魔法を使う人類と魔族が繫栄したことで，世界の瘴気の浄化速度が追い付かなくなった。誰もやらないのでベイリンがしぶしぶ掃除して，黒の海に排出している。でもその副産物であるベイリンの力は増大することになるので，本人曰く「自分はまだまだ現役」らしい。年を取るのかということは放っておいて。

# 黒の海

絶えず無数の「泡沫」（＝世界）が誕生して，すぐに消滅している。この世界は非常に強固な構造を持つため，崩壊の運命を免れた。

今は，崩壊の圧力と，マホリによって世界が広がろうとする内圧が釣り合って安定している。

# マホリ

泡沫の誕生と消滅の原動力。

この世界は透明であるため，マホリを取り込むことができる。水泡の中に取り込まれたマホリは最終的に瘴気に変化し，世界を蝕む。

# 魔法と致忌の知恵

ベイリンの最大のやらかし。

昔酔った勢いで，酒場で，大声で魔法の深奥を伝授してしまった。

魔法を使うとマホリを用いて世界に干渉できるが，瘴気は世界に残る。

ベイリンがしぶしぶやっている瘴気の掃除，実は盛大なマッチポンプである。

# 人間と魔族の関係

魔族は魔法にたけていたらしい。しかし今は人間も魔法を使えるので実はあまり変わらない存在。

「大輪の鱗月」により，魔族は存在が消えることはない。無限に増える人口を抑制するため，年を取った魔族はアロのもとに行き，自らの加護を消してもらう。

遺伝子的に，魔族の歯はギザギザで，目はオッドアイ（左が暗く右が明るい）なことが多い。歯がギザギザなため，魔族と恋愛関係になる人間はほとんどいない。

# **旅の流れ**

勇者一行は高位裁判官の要請で，アロを倒し，魔族をせん滅する任務を引き受けた。

ミグルとヨル（＝アロ）と共に旅に出かける。

ヨルの歯はギザギザらしい。

道中で出会った魔族の人柄を見て，自分たちの行為は本当に正しいのかどうか悩む。

ヨルもだんだんと自己犠牲の方に傾きはじめる。

魔王城に到着，そこでヨルの正体が発覚。成り行きで戦闘が始まる。

結局アロは手加減した。勇者もこのまま殺すのはだめだと直感，とりあえずアロを地下牢獄に監禁する。

ベイリンと出会う。まるで自分の子供のように，アロのやってきたことについてべらべらとしゃべり始める。

もう一回アロと話す。アロは勇者，そして人間に対してどう接すればいいのかわからないと告白する。

なんかおかしくね？となって，調べるために魔王城にみんな泊まる。

過去の文献から，高位裁判官はほぼ確実に瘴気に侵されていることが判明。瘴気の沈降ルートの膨大な計算を（ベイリンがひとりで泣きながら）実行，裁判邸がそのルート上にあることが判明する。

裁判邸の場所を移すために，勇者一行はレメデの法律を利用する。勇者，ベイリン，アロの連名で高位裁判官に「決闘裁」を申し込む。レメデの一大ニュースになる。

朝早くから決闘裁が始まる。高位裁判官たちに押し切られそうだったが，傍聴していた民衆がアロたちに共感，裁判邸で殴り合いが始まる。（武器を持ち込めないため）

アロが本気を出して即効鎮圧する。アロはベイリンにやったように，高位裁判官たちの瘴気を吸収する。明らかに流れが変わり，その日の夕方，アロ，勇者一行，ベイリンは，民衆に暖かく迎えられながら裁判邸をあとにする。（暴動がおこったため，事務上決闘裁は無効になり，和解という形になった。）

アロと仲良くなる。成り行きで魔王城（アロ曰く『ダム』というらしい）で暮らすことになった。アロが瘴気を吸収していたことについて尋ねると，アロは浄化のために30分以上寝られないということを話す。健康上問題ないというアロの主張を無視して，勇者（ここからはプレイヤーと呼称）たちはこの問題を解決するために動き出す。

アロの身を蝕む瘴気を駆逐するため，ベイリンと話す。

世界の構造について，魔法とマホリ，そして瘴気の関係について，知ることになった。

あのあと微妙な雰囲気になっていた高位裁判官と協力し，アロの合意のもといろいろ人体実験をしてみるが，結局うまくいかない。（ですよね～）

アロはみんなが自分のことを気にかけてくれて嬉しそうだ。

諦めムードの中，ベイリンがなぜ物知りなのか尋ねると，本人も知らないと答える。天空で生まれて，そのときからすべてを知っていたらしい。ここで高位裁判官がナイス考察「瘴気は沈んでいくのに，正反対ですね」。

察しのいいベイリンは，自分の体の下半身を唐突にもぎ取った。みんなが驚く中，それをアロに巻き付けると，アロの瘴気が消えていく。

ベイリンは，自分が瘴気と対極の存在だと気づいた。自分と瘴気が合わされば，マホリが生まれる。瘴気の中にいても死ななかったのはこれが原因。つまり，ベイリンの体を犠牲にすれば瘴気は消せる！ベイリン「やらんわ！世界中の瘴気はアロの体の中にある瘴気の一億倍以上あるんだぞ？今アロを浄化するのにわしの半分を使ったのに，消えちまうわ！！！」マホリは大半が瘴気になるが，ごく一部がベイリンになるようだ。ベイリンのスーパー頭脳で概算したところ、世界は１２億年前に生まれて，ちまちま集まった副産物がベイリンになったのが１５００年前だそうだ。

ベイリンは自分が特別な存在だと知って優越感に浸っている。

ここでアロが鋭いツッコミ「今の瘴気の蓄積速度から考えると，なんでベイリンが生まれる前は瘴気が世界に溜まり過ぎなかったの？」

ベイリンが動揺したことで，みんなの視線がベイリンに降り注ぐ。ベイリンはしぶしぶ，自分のやらかしを告白し，その場はなんともいえない空気になる。「瘴気を掃除しているって，それ，マッチポンプでは…？」

プレイヤーはミグルに，ミグルがアロのことを好きなことを告白される。ダムでアロが正体を明かしたときに，ひとめぼれだったそうだ。

プレイヤーは散々物好きだとからかった後，とりあえずばれない様にミグルとアロのデートの約束を取り付ける。

（ミグルの一方的な）デート中。ふと疑問になって，アロに質問する。「あのさ，俺人間だけどいいのかな？」アロ「なんのこと？人間とか関係ないよ！今日は楽しかった！また遊ぼうね！」

ミグルは人間として，自分が魔族を好きになる気持ちを隠そうとしていた。しかしこの日を境に，人間が一方的に魔族との恋愛を拒んでいるだけだと気づいてしまう。

人間は魔族に好意を抱くことはほとんどない。なぜなら魔族のギザギザな歯が，生理的に受け付けないからだ。しかしミグルは，自分はそう思っていないのに周りに合わせてアロへの好意を隠していたことに嫌悪感を抱く。

ミグルはその晩眠ることができなかった。アロの優しい人柄を思い出し，アロにはもっといい人が見つかるだろうという結論に至った。アロから離れることを決意し，その次の日，それとなくアロに切り出す。「俺，レメデに帰って仕事見つけようかなって思てるんだ」

アロは本心からミグルに「寂しい」と伝える。ここでおせっかいなベイリンが「アロの仕事をプレイヤーと一緒にやったらどうだ？報酬はおいしいぞ。」などとぬかす。ミグルはアロのことが諦めきれなくて，ついうんと答えてしまった。でもアロの笑顔を見て「もう少し，もう少しだけ一緒にいたい。その笑顔を見るだけでいいんだ。」と思う。

「ミグルはいつか自分に正直になれるのだろうか？おっと，廊下からあわただしい足音が聞こえる。どうやらまた面倒ごとが起こったようだ…　完」